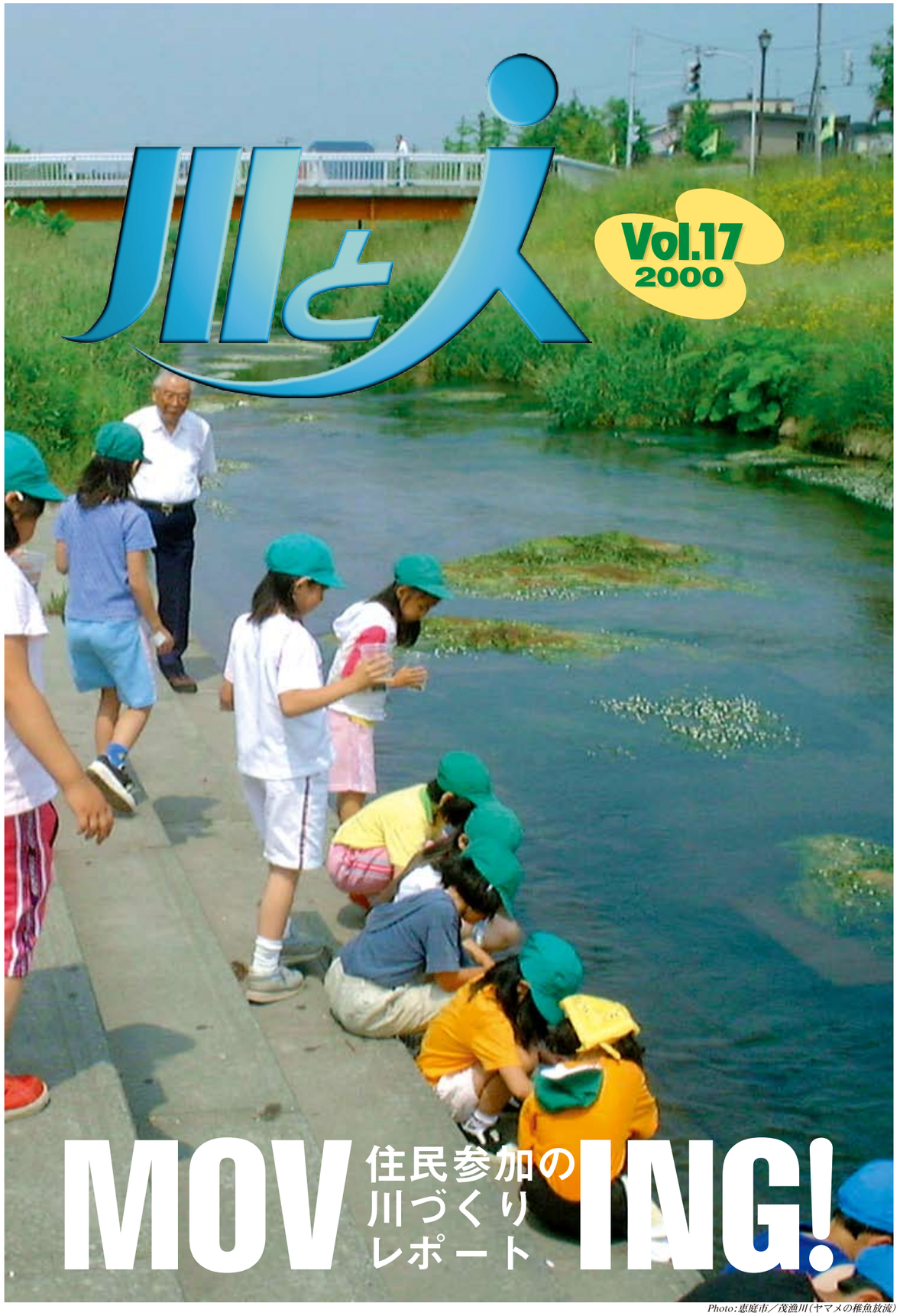


Photo：恵庭市／茂漁川（ヤマメの稚魚放流）

お婿さん選びは慎重、かつ大胆に

ハナカジカ

カジカ科

カジカ科魚類は、海域と淡水域、またその両方など多様な生活史タイプを持っていますが、淡水カジカ類は繁殖に共通した特徴がみられます。北海道の河川に広く分布するハナカジカは、早春の融雪増水時に雄が大きな石の下に巣穴を作り雌を招き入れて産卵、その後雌は追い払われ、雄は別の雌を誘い入れて繁殖活動を繰り返します。雌はいくつかの巣穴を訪問しすでに卵塊を持つ雄を好むことから、卵をより確実に守ってもらうための行動と思われます。餌は底棲の小動物と小魚、またサケの稚魚を食すため害魚とされていますが、川になくてはならない名脇役です。

監修　北海道開発局・石狩川開発建設部・旭川開発建設部
発行　（財）石狩川振興財団　〒060-0051 札幌市中央区南1条東1丁目5番地　Tel（011）242-2242　平成12年11月
ホームページアドレス　http://www2.ocn.ne.jp/~ishi-riv/

MOVING! 住民参加の川づくりレポート

環境の保全と地域の意見の反映を掲げた平成9年の河川法の改正から、
新しい川づくりが今、動き始めています。
地域住民が参加して進められる初めての試み。
その現場には常に苦悩と感動がありました。

札幌市／ホロヒラみどり会議
三笠市／水辺の楽校
石狩市／環境、緑、都市基本計画
旭川市／牛朱別川分水路
深川市／石狩川クリーンアップ作戦
新十津川町／徳富川市民ふれあい点検
砂川市／オアシスパークアジサイガーデン
石狩川流域／緑化推進事業

川と人 Vol.17 2000

Contents

住民参加の川づくりレポート 2〜6

インタビュー

川に生きる
旭川大学経済学部助教授
出羽　寛さん 7・8

流域の現在
夕張市「ゆうばり国際ファンタスティック映画祭」 9
上富良野町「北の大文字」 10

カナダ川紀行
北海道開発局　開発土木研究所
中津川　誠氏 11〜13

Rivers Topics
北海道開発局　旅のおともに、「川の時刻表」をどうぞ 14
北海道開発局
旭川開発建設部　旭川のまちづくりと忠別川 15
北海道　発寒川遊水地と紅葉山遺跡 16

News&News
石狩川治水学習館（川のおもしろ館）
開館10周年記念イベントを開催 17
石狩・紅葉山遺跡で国内最古の捕獲遺構発見 18
恵庭市制施行30周年記念「親子川下り」「Eボート大会」 18

石狩川振興財団　活動報告
第 6 回 北海道森と湖に親しむつどい・
第29回 かなやま湖湖水まつり 19
漁川ダム見学会 19
森のはなとぴあ2000 石狩川治水90周年記念事業
「feel the River」〜in the afternoon〜（川を感じる午後） 20
第 2 回　石狩川流域交流フェスタ開催記念
「トーク&ミュージック」 20
CD-ROM「石狩川」制作 21
平成12年度 市町村河川情報委員情報交換会議 21
平成12年度 親水体験親子バスツアー〜石狩川中流〜 22
石狩川振興財団のホームページが開設 22
編集後記 22

特集 住民参加の川づくりレポート

MOVING!

計画づくり

合意形成とアカウンタビリティー（説明責任）。この大命題に挑む。

1haの地を舞台に、大きな一歩が踏まれた
札幌市
ホロヒラみどり会議

大都市札幌の市街地を流れる豊平川の左岸上流（幌平橋）の築堤工事に伴った、左側斜面の活用を付近住民と考える「ホロヒラみどり会議」。昨年4月から重ねた議論の末、「森＋草っぱら」案が今年の6月、決められました。

しかし、決定までの1年はまさに苦悩の連続で、都市生活者が関心を持って取り組んでくれるかという疑問の声が内部から上がる中での船出でした。

とにかく現場をみる事を重視。工事によって切られる草木を利用したイベントでは参加者90名のうち36名が子供達で、自然を素材にした遊びに無垢な笑顔を見ることができました。小木や野草を移植したポットは植樹の日まで、それぞれの家庭で育てられることに。また、伐採された木の輪切りもプレゼントするなど、自然体験型の手法は参考になるものばかりです。しかし話し合いでは、行政誘導と報道されたり、会議のお知らせが漏れた事によるトラブルなど、幾度も存続の危機に見舞われました。そして、その度に参加者全員が同じ目線で話合う。行政と市民の溝を埋めたいという強い気持ちが前に進ませました。このままじゃいけないと感じた住民と、すべてを受け入れる覚悟の札幌河川事務所の担当者達。

これがホロヒラみどり会議の成果です。

今後は「ホロヒラみどりづくりの会」を住民が組織し、維持管理に関わる予定です。

「ホロヒラみどりフィールド祭」では切られる草木で思いっきり遊んだ。この時の子供達の笑顔が大きな励みに。

郷土への愛着を深めた、住民参加のさきがけ
三笠市
水辺の楽校「であい」

身近な自然を利用した環境教育として建設省が進める全国プロジェクト「水辺の楽校」。石狩川流域では、平成9年に初めて三笠市唐松栄町幾春別川・清松橋上流に開校、計画立案に住民が参加した事例のさきがけといえます。

3つの学校が集中する地域特徴から、意見交換会には学校関係者や河川愛護団体、町内会の方々が参加。平成7年の10月から、議論を重ねた結果、翌年の1月に基本的な整備方針が決められました。「自然の中で、子供からお年寄りまで一緒になって河川とふれあえる広場」をテーマに、市民の要望を反映した憩いとあそびに溢れた空間が誕生しました。

当初はお互いにとまどいと、考えの相違もありました。しかし、この川に対する想いは同じ。幾春別川は炭鉱最盛期には炭塵が流れ、洪水の被害などもあって、危険なイメージがつきまとっていました。だからこそ住民の愛着は深く、岩見沢市と北村を合わせた流域3市村の河川愛護団体が、活動や会合などを行ってきました。そして、100年ぶりにサケが遡上、市民の幾春別川への関心がぐんと高まったのです。現在は住民によるゴミ拾い、学校の利用がありますが、さらに地域に根ざした活用を、市民とともに考えていきたいそうです。

市内でも有数の緑に溢れた該当地域。夏は子供の笑い声で溢れる。

さまざまな工夫がなされた施設内。

間口を広げた参加と結果の報告
石狩市
現在進行中の環境・緑・都市基本計画

石狩市では、環境・緑・都市の3つの基本計画を、平成13年までの3年間で、市民の意見を取り入れながら策定しています。河口のまち・石狩市らしく、まず水上見学会を実施、雰囲気が盛り上がったところから始まりました。広く意見や提案を反映したい事から、ワークショップ方式の「市民協議会」を月1回程度、定期的に自由討論方式の「意見交換会」を行っています。

特筆すべきは協議会のメンバーを市民に限定せず、通勤通学や石狩市に関心のある方ならどなたでも参加可能にしている点。約1年間で延べ400人が参加しました。また、協議会に参加する人達は、ほんのひと握りであることを自覚して、結果は随時広報やホームページ等で伝えています。

計画策定に先立って行われた水上見学会。全く違う川からの風景に興奮。

●石狩市の公式ホームページに結果を報告　http://www.city.ishikari.hokkaido.jp.

大所帯の手探り状態から一変したのは第6回の協議会から。市民の「今後はもっと計画策定に関わりたい」という提案で、作業部会を市民協働のワーキンググループに変更したのです。この提案に職員一同感激し、これを機に協議会の資料や説明方法などが格段と向上、内容が充実してきました。また、これまで川と市民のつながりが薄かった点を省みて、環境教育や学習の場としてとらえ、活用案も検討しています。

市民協働のワーキンググループになってから、市民協議会の内容が充実。

住民が積極的に関わる、真のかわのまちへ
旭川市
牛朱別川分水路

牛朱別川から石狩川までの約5・7㎞を幅約200mにわたって掘削し、洪水時には牛朱別川の洪水を石狩川に約1,000㎥／s流して、旭川市街を洪水から守ることを目的とした牛朱別川分水路事業（永山新川）。現在、永山新川の新たに創られる河川空間の整備の仕方について、永山地域の代表者、学識経験者、行政で組織した「永山新川空間利用計画に関する懇談会」の中で話し合われています。これまでの懇談会の中では、人々が憩いやすらぐ場所、水辺に下りて水とふれあい、遊んでもらう所。また、水鳥等を観察したり、自然体験学習する場などの区分けした整備を行う計画案が、決められています。

住民が参加して行われる植樹。北の美しい都市を目指して。

そして、この計画案をもとに、永山地域の代表者、地域の学校関係者、鳥類・植物の専門家、行政で構成する「永山新川水辺づくり意見交換会」を開いて、実現化について議論を重ねています。具体的には、水鳥が飛来できる水面を確保するための工夫や、野鳥の休憩場所となる中州、動植物の生息環境となるような多様な自然環境。また、子供達も水辺とふれあえるアクセス施設などについても議論を進めています。

さらに「生態学的混播法」の住民参加の植樹会も行われています。

たくさんの水鳥が飛来し、人々を和ませる水辺。

維持・管理

見て、体験することで、何かが変わる。

大人顔負けに一生懸命ゴミを拾う子供達。こんな光景があちこちで見られる。

川への関心を深める場に

深川市

石狩川クリーンアップ作戦

石狩川クリーンアップ作戦は、石狩川と石狩川流域の発展を目的に開催される「石狩川サミット」の、第2回石狩川サミット宣言で発表され、「石狩川の日」（8月7日）のアクションプログラムとして、各市町村が独自にまたは合同で行っています。昨年度は石狩川流域全体で446団体、13,552名が参加しました。

深川市では平成6年から毎年8月7日に、石狩川に架かる深川橋を中心に、上・下流約4㎞にわたって住民がゴミ拾いをします。この区間は野球場、サッカー場、公園等のある、市民の憩いの場となっていますが、今年は空き缶や季節柄花火の燃え殻が散在し、軽トラック2台分のゴミが収集されました。

参加者は毎年50～70名、市が広報などを通じて募る他、市内で活動するボランティア団体に依頼します。最近は子供連れで参加する姿が見られるようになり、信じられないようなゴミに驚き、自分のこととして捉えてくれるようです。この模様はNHKの北海道版ニュースで放映され、反響もありました。

深川市では川へ関心を持ってもらう場として、来年度以降の実施も検討されています。

河川敷の花々に思わず心が和む、現地確認。

年に一度の状況説明と意見交換

新十津川町

徳富川市民ふれあい点検

徳富川は建設省から、平成8年4月に「ふるさとの川整備河川」の第1号の指定を受け、「ふるさとの川整備事業」として滝川河川事務所が護岸工事や高水敷整備等を、町が花壇、休息所、四阿等の整備を行い、平成14年に完成予定です。その中で、平成10年から河川愛護月間の一環として行われているのが「徳富川市民ふれあい点検」です。これはまちづくり団体や河川愛護団体を中心にした新十津川町民に、整備計画やその年の工事状況の説明を行い、その後全員で現地の状況を確認したうえで、意見交換をするものです。

毎年、工事の状況をていねいに説明。ここに信頼が生まれる。

今年の意見交換会では、高水敷や川へのアクセスのしやすさ、また子供達が炊事等ができるような高水敷の整備、そしてより自然の状態に近いような整備を、という要望が出ました。

この点検を通じて整備状況を広く公開できるとともに、町民の徳富川に対する忌憚のない考えや思いを知ることができます。さらにその提案を計画づくりに反映していくことで、まさに地域のための、ふるさとの川になります。

MOVING! 住民参加の川づくりレポート

植樹と花づくり

水辺には緑と花が良く似合う。そのために成すべきこと。

子供達にやさしく指導するお花のプロで、発案者の多比良さん。

住民の熱意がまちを動かした

砂川市

砂川オアシスパーク・アジサイガーデン

今までは行政の働きかけによる住民参加の事例を紹介しましたが、逆の例もあります。

砂川オアシスパークは、石狩川流域の洪水による被害を軽減する主要な治水対策の一つとして作られ、多彩なレクリエーション施設も整備され、たくさんの人々で賑わっています。

さて、パーク内の管理塔の下斜面に、アジサイが植えられているのはご存じですか？　これは道内各地で押し花アートを教えている、多比良桂子さんが中心となって植えたものです。「緑があっても花がない。それでは寂しい」という多比良さんの熱意に応え、砂川市がオアシスパークを管理する石狩川開発建設部に陳情し、アジサイの苗が植えられたのは去年のことでした。その後正式に「あじさいの会」が発足、今年度は場所を広げて植えました。

会では、砂川市がアジサイのまちとして定着し、文化活動を発信する「アジサイ祭」を開くという大きな夢を持っています。しかし実際のところ、たくさん植えたくても管理面と資金面が大きな壁となっています。市では「急がず少しずつ浸透させるべき」と、大きな目で見守り続ける姿勢です。

見ごろになるにはあと数年必要ですが、地道な努力が、大輪の花を咲かせることでしょう。

アジサイはオアシスパークの澄み切った空と水のイメージ

●アジサイ情報が掲載されている、多比良さんのホームページ　http://ww6.et.tiki.ne.jp/~k-oshibana/

ふるさとの緑を育て、里親を育てる

石狩川流域

緑化推進事業

平成5年の「石狩川サミット」で宣言された「石狩川流域1人1本280万本植樹」。すでに平成6年には調査・検討に着手、平成8年から流域各市町村で行われています。方法は生態学的混播法で、地域の樹種のタネを拾い、育て、苗を植えるという、ふるさとの自然に近く、行程も簡単なものです。これまで15市町村で実施し、石狩川流域全体で3年をかけて実施していく予定です。

この事業では作業を住民に指導する「みどりの里親」も育てています。「みどりの里親」は現在までに、10市町村で19名の個人と団体が登録されていますが、住民主体の植樹においては、指導するリーダーが必要不可欠です。そのためには「みどりの里親」の登録を増やすとともに、技術指導や要望によっては資材の提供、長期的な活動には感謝状を贈ることなども考えられています。今年は10月から11月上旬頃に実施します。

じつにさまざまな人達が参加する植樹会。環境教育に理想的。

あっちに曲がり、こっちに曲がりながらも、道はできている。

【レポートを終えて】

今回の取材を通して、一口に住民参加といっても一朝一夕にできるものではないと痛感しました。でも、たくさんの汗を流すことは決して無駄ではなく、次に継ぐ道は確実にできていました。

住民参加の川づくりは始まったばかり。「川と人」ではこれからも地域住民と連携した川づくりに注目していきたいと思います。

旭川大学　経済学部　助教授
出羽　寛　さん

川と人との つながりを作る 今、その時が来た

川に生きる

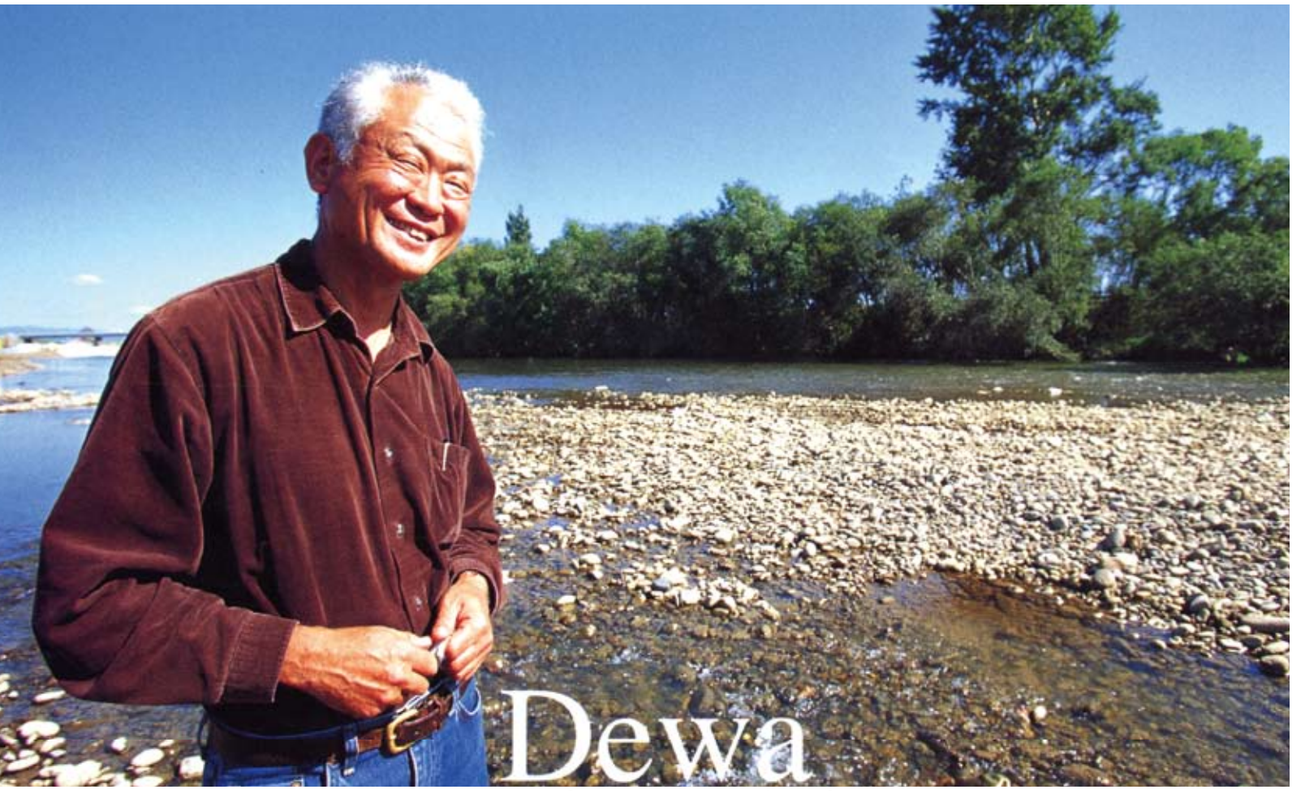
野ネズミ全般の研究を中心に、旭川大学で動物生態学を教える出羽さんは、約10年にわたって道内有数のカタクリ群落のある突哨山のゴルフ場建設の反対運動を続けました。カタクリ他1,600種の生態系のある、出羽さんいわく“ありふれた雑木林”の大切さを訴え、小さな力はやがて大きな力になりました。数々の川づくりにも参加する出羽さんに、現在の川はどんな風に映っているのでしょう。

いろんな生き物と いろんな人の声を生かした “おもしろい川づくり”を。

「今、旭川は“川のまち”といわれ、確かにたくさんの川があり橋もひじょうに多いんですけど、人が川に行かない。それで胸をはって“川のまち”といえるのか。私が小さかった頃は、子供はみんな川に行きました。そういう川と人のつながりがあってはじめて“川のまち”といえる。じゃあ、なぜ人が川に行かなくなったかというと、やっぱり“川がおもしろくなくなった”んですね。私が子供の頃は、忠別川にヤナギの林があって、小さな流れがあったり、水面が盛り上がるほどウグイの稚魚が群れをなしていました。今でも魚はいるんです。いるんだけどあっけらかんとしちゃって、水も汚いし、親も危険だというし、管理者も責任とらされるし…。全体的な状況が、川に近づけないようにしている。全部を一気に解決することはできないけど、やっぱり“川をおもしろくする”必要があると思います。水の中も河川敷にも、いろんな生き物が住めるような川づくりが必要です。

この前はじめて、志比内川の魚道の利用状況の調査をしました。6種類の魚がいて、そのうちの一種類がニジマスで放流したものです。それで昔の川の状況を知るために、60歳代の釣り名人達に聞き込みしたんです。サケやマスはいつから上ってこなくなったかを聞いたら、昭和30年代後半から40年代前半。ちょうど花園頭首工の改修時期と重なるんです。彼等はヤマメを釣りたいと言ってました。私はそういう人達が川で見てきたことを川づくりに反映できたら、すごく変わると思う。住民参加とはそういうことだと思うんです。」

Interview インタビュー



Dewa Hiroshi

市民生活からの 視点を取り入れ、 はっきりとした目標を持つ。

「もう一つは水質の問題です。3ppmという基準値には達していても、はたしてそこで子供が遊んだりできるのか、釣った魚は食べられるのか。そういった市民生活からみた基準が必要だろうと思うんです。飲んでも大丈夫なような目標を持つ。それだけでも違うと思います。川と人のつながりを作っていくのは簡単にはいかないけど、いろんな生き物が住み水がきれいだという、はっきりとした目標を持つ。ゴルフ場の反対運動の場合、突哨山の先端は有名な男山自然公園で、雑木林は知られていなかった。でもごく普通の雑木林に、ごく普通の自然があるということを、市民にわかってもらえた。それが大きい。

川の問題も同じです。サケと違ってフクドジョウはその産卵場所さえ調べられていません。でも天然記念物ばかりだったら、遊びに行けないでしょう。そういった市民生活の視点からみる自然を大切にしてこそ、人と川とのつながりができる。ちょっと前まではできなかったけど、今、そういう時期が来つつあると思っています。」

これから学生とコウモリを採りに行くと目を輝かせる出羽さん。まさに自然体の人柄や考え方に教えられることは大きい。

上富良野町

夢が灯る 世紀を越えた

故郷の懐かしい顔や、新しい出逢いが待っているのも楽しみの一つ

夏の賑わいとは一変して、ひっそりと芯まで“シバレ”る上富良野町の冬。しかし、この時期こそ住民が心待ちにするイベントがあるのです。新年の幕開けとともに白一色の公園の斜面に、縦70m、横50mの巨大な「大」の火文字が浮かび上がる、「北の大文字」。今回で14回を数えるこのイベントは、大正15年の十勝岳噴火による大惨事からまちを復興させた祖先を讃えるとともに、再び悲劇が繰り返さないことを願い、また、あえて冬に雪を利用した北国ならではのイベントを行うことで、まちに活気を与えたいと商工会青年部が始めたことがきっかけです。第一回目の予算はわずか5万円。師走の忙しい時期に毎晩遅くまで、また昭和64年の十勝岳の噴火時にもあえて継続し、今では若手中心の団体が実行委員会として実施、当日も多くの住民が協力し合う、“オラがまちの一大イベント”に成長しました。

御神火ランナーがリレーして、末広がりの大の字に点火していく壮大な火文字には、このまちの若くそして大きな夢が満ち満ちています。さあ、今回は世紀越え。町民や故郷に帰る人々の、色々な人のそれぞれの21世紀への想いが炎に託されることでしょう。

北の大文字

2000.12.31[SUN] ⇒ 2001.1.1[MON]

●会場
上富良野町日の出公園

●お問い合せ
北の大文字実行委員会　TEL(0167)45-2191

http://www.town.kamifurano.hokkaido.jp/

夕張市

話題作ズラリ、真心キラリ

女優の島田陽子さんが結婚式をあげるなど、映画人のファン多し。

炭鉱からの脱却をすすめる夕張市の名を世界に知らしめた、「ゆうばり国際ファンタスティック映画祭」。90年の歴史的第一歩から21世紀の幕開けとなる来年度まで、その規模や内容は進化し続けています。新作・話題作をいち早く観られるという魅力もさることながら、映画祭の目玉がもう一つ。それは純粋で誠実で、底抜けに明るい夕張住民のあったかいおもてなしです。期間中は1,000人を超えるボランティアが工夫を凝らしたイベントを各所で実施、ゲストや観客とのふれあいシーンこそ、映画祭最大の見所でもあるのです。とてつもない寒さの中、JR夕張駅前でのサムライ姿での歓迎や各セレモニーでのパフォーマンス、飲食料と最新情報の提供などなど。映画祭のゲスト達はみな、苦しい時を経てきた強く美しい笑顔と、忘れかけた日本人の心に触れ、感動して帰っていきます。

現在では通年をとおして“映画の街夕張”を印象づけるため、本町商店街は店の壁に名画の手がき絵看板を掲げ、話題になっています。21世紀初となる次回の内容は12月頃に発表されます。映画とスキーと　人情に溢れた、古き佳き日本に出会える「真冬の夢」を観ませんか？

ゆうばり国際ファンタスティック映画祭

2001.2.15[THU] ⇒ 2001.2.19[MON]

●会場
ゆうばり文化スポーツセンター、夕張市民会館、ゆうばりホテルシューパロ　他

●お問い合せ
夕張事務局　TEL(01235)2-1365

http://www.dolphin.co.jp/hpr/yubari/

カナダ川紀行

CANADAs River

北海道開発局　開発土木研究所
中津川　誠

川を見るまえに

私は人事院の在外研究員として、1999年9月21日から2000年2月16日までの150日間を、カナダ・ケベック市で生活する機会を得ました。ケベック州はまさにカナダの歴史を知らずして語ることのできない場所です。そしてこの場所が、英語圏に包囲された北米フランス語圏最後の砦と言っても言い過ぎではないような気がします。

文明社会としてのカナダは、16世紀の半ばにフランス人ジャック・カルティエがセントローレンス川を遡って探検したことが出発点となります。その後、フランス人が中心となってカナダの植民と開拓を行いますが、18世紀半ばの植民地争奪戦の中、英国に支配権が移ります。以来、尊厳あるフランス系住民は最大のマイノリティーとなって現在に至っています。このような英仏系の主導権争いに加え、最近は先住民や移民で来る他のマイノリティーにも配慮せざるをえず、国家運営に難しい舵取りが余儀なくされているというのが現状です。

大陸横断国家としてのカナダは、アメリカ合衆国とのいさかいから生まれたのはご存じでしょうか？

カナダがかつてイギリスの植民地であった（現在は英連邦の一員）のは知っている方も多いでしょう。つまり、独立を巡ってイギリスと敵対していたアメリカへの対抗上、植民地としてバラバラだった各州が統合されたのが現在の連邦国家・カナダのはじまりというわけです。

歴史的なケベック橋にて

ケベックとセントローレンス川

ケベック州はカナダ揺籃の地でもあり、仏系住民が圧倒的多数を占めます。州の中心都市にはモントリオール（人口約350万人）や州都の置かれているケベックシティー（人口約70万人）があります。私はケベック市近郊にあるケベック大学水科学調査研究所（INRS-EAU）に在籍し、水文学の研究を行ってきました。

ケベック市はUNESCOの世界遺産に登録された大変美しい街です。また、この地を境にセントローレンス川の川幅がぐっと狭まります。したがって、古くから交易や交通の要衝として栄え、また、狭窄部の河岸が台地上にせり出しているので、天然の要害として戦略上の拠点ともなってきました。

Vieux Quebec-といわれるダウンタウンのある狭窄部付近の下流には、巨大な中州ともいえるオルレアン島が浮かんでいます。このオルレアン島から下流はもはや川とは呼べない水域となります。下流に数時間も車で走ると対岸は見えなくなります。この辺には夏の間、クジラも回遊してくるし、淡水と塩水が混じって豊かな生態系が形成されているとのことです。

一方、ケベック市から上流に向かうと、すぐに立派なトラス橋が見えます。これはセントローレンス川を完全に横断する橋としては最下流にあり、20世紀初頭の建設の際には、落橋事故で多くの犠牲者を出しながらも完成した歴史的モニュメントともなっています。さらに上流に向かうと、トロワリビエールやモントリオールなどの町を経て、5大湖のひとつ、オンタリオ湖に達します。

ケベックにはセントローレンス川をはじめ、多くの河川や湖沼があります。北極圏にいたるそれらの水域は徹底的に利用され、大規模な水資源開発が行われていることに言及しておかねばなりません。ハイドロパワーのもたらす恩恵はケベックを潤し、経済戦略的にも大きな価値をもたらすものとなっています。ケベックの水資源開発や管理を一手に引き受けるのがハイドロケベックという国策会社で、私のいた研究所でもそこをスポンサーとした水文・水資源の研究が盛んに行われていました。

ここでもう一つ触れておきたいのが冬の寒さです。零下30度を下回る寒さというのは一般にはちょっと想像できないだろうと思います。息をすると肺が痛いとか、建物といわず車といわずすべての物体から水蒸気が上がっている光景などはあまり見ることができないかと思います。この時期、セントローレンス川は結氷しますが、ところどころ開氷して流れもあり、船舶の航行は可能となっています。

［右上］ケベックとセントローレンス川の位置
［右下］ケベック市北部にあるシクトゥミの1996年7月洪水のモニュメント
［左］ローレンシャン高原の紅葉、ミラモンの湖水と山々

WORLD REPORT

カナダの水管理

水を巡る争いは古今東西を問いません。国家の成立過程からしても、カナダでは「州」と「連邦」の主導権争いが絶えませんでした。豊富な水資源を背景とした水問題についてもこれに関しては例外ではありません。現在は「州」が表流水、地下水ともに所有権を有するとして法令上整理されているようです。ただし、国家経済に関係のある舟運や漁業の問題については連邦の権限下にあり、農業問題などは州と連邦で権限を分かち合うなどとされていて、分野別の利害調整はなかなか複雑なようです。

治水については、アメリカ型の思想で行われているようです。１９７０年代に増大した洪水被害や経済的な制約によって、ダム建設や築堤などの構造物による手段（Structural measures）だけに頼る治水に疑問が投げかけられました。このような中で登場したのが、洪水予警報の整備や避難体制の確立といった構造物によらない手段（Non-structural measures）を併用した治水です。これは日本の総合治水に近いものと考えられます。ただ、それ以上の極めつけとして「洪水危険域（Flood Risk Area）の指定（Designation）」という手段が用意されています。これは、マップ上で危険域に指定された場合、ほぼ完璧な形で土地利用規制がかけられるような強制力を持つものです。大半が氾濫域に居住している日本でこのような網掛けまでできるかどうか疑問ですが、ハード対策・ソフト対策両面を体系的に実施する総合治水は、地元も巻き込んでもう少し広く展開されてもいいような気がします。

最近は、１９９６年７月にケベックで大きな洪水が起きています。このときは浸食によってダム堤体の横に流路ができたり、ダムの貯水池から水が溢れ出したりと、予期せざる事態が起き、７名の死者も出たりしました。これを受けて、ケベック州政府では「ダム安全化法案」などを審議するなどして、より一層の治水整備に向けて取り組んでいるようです。

おわりに

今回の派遣は北海道開発庁、北海道開発局、そして人事院の関係者のご尽力で実現したものです。５ヶ月間の短い時間ではありましたが、百聞は一見に如かずのとおり、実物を見たり接したりして得たものは、本当に一生の糧となりました。関係各位に心からお礼を申し添えておきたいと思います。

※参考文献
「カナダにおける水管理－歴史と現状－」中津川誠著（開発土木研究所月報No.565pp.34-42,2000）
「カナダにおける治水事業－Red River 放水路－」斉藤大作著（開発土木研究所月報No.543pp.47-51,1999）

WORLD REPORT

［右上］厳冬期のセントローレンス川
［右下］1996年7月の洪水時の浸食によりダム堤体横にできた流路
［左上］ケベックから下流のセントローレンス川の風景。遠くに対岸が霞む
［左下］滞在先のケベック大学INRS-EAUの水文統計学講座のスタッフ

Rivers Topics

北海道開発局

http://www.hda.go.jp/hdb/index.html

旅のおともに、「川の時刻表」をどうぞ

■石狩川本支川を含め、主要な河川を網羅した「川の時刻表」
表：北海道路線図と路線別到達時間チャート
裏：路線・特急別時刻表と川の紹介

北海道開発局はＪＲ北海道の協力を得て、全国初の「川の時刻表」を作りました。

川の時刻表とは、川を駅に見立て、列車が川を通過する時刻を時刻表形式にまとめたものです。路線ごとに、駅を出発後の川への到着時間を示したチャートと、北海道の路線図、列車ごとの時刻表、そして各川の紹介を、Ｂ４サイズの二つ折り用紙の両面にカラーで表しました。

この時刻表により、どなたでも車窓からの川の風景を楽しむことができます。

全道の主要16駅で7月から約3万部配布され、テレビ、ラジオ、新聞等でも紹介されるなど、大変ご好評をいただいています。

全国初!

「川の時刻表」についてのお問い合せは：
(財)河川環境管理財団北海道事務所　TEL.011-261-7951
E-mail；hokkaido@kasenkankyou.gr.jp まで

Rivers Topics 北海道開発局 旭川開発建設部

http://www.as.hda.go.jp/

21世紀、旭川が変わります 旭川のまちづくりと忠別川

▲市街地形成イメージ

旭川市は、人口約36万人を擁する北海道第2の都市として発展し、21世紀に向けて北海道の拠点都市としてその役割が期待されています。

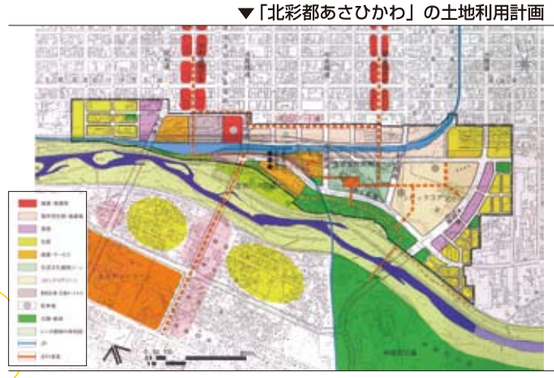
現在、旭川市の都市部では旭川駅周辺地区の整備事業が進められています。この事業は、既存の都心部を駅東側へ拡大するとともに、宮前地区の旧国鉄跡地や、鉄道高架によって利用可能になるJR用地を有効に活用して、都市機能の充実と強化、及び活性化を図り、さらに「川のまち旭川」にふさわしい豊かな自然と調和した均衡ある市街地形成を目指すという、将来の旭川市発展のために極めて重要な意義を持つ事業で、平成10年度から本格的に事業着手しています。

また、旭川駅周辺開発によって、旭川市が北海道の拠点都市として美しく、活気溢れる「北の都」になるよう願いを込めて、旭川駅周辺開発地区の愛称が「北彩都あさひかわ」と命名されています。

計画では、計画区域に隣接する忠別川の環境を活かした都心形成を進める整備方針で、忠別川の自然空間と一体となった、川の空間を現在の都心まで引き込むような、自然環境を活かしたまちづくりを進めることになります。その結果、市民の憩いの場となっている神楽岡公園と一体になり、市民が水とふれあい、やすらぎを得られる貴重な水辺空間が形成されると考えられます。

忠別川の河川整備は、忠別川水辺プラザ整備事業として旭川駅周辺の交流拠点整備と一体となった河川空間の整備を進めています。

▼「北彩都あさひかわ」の土地利用計画



Rivers Topics 北海道

http://www.pref.hokkaido.jp/kensetu/kn-kasen/kasenkahome/coverp.htm

緑に溢れた太古の水辺 発寒川遊水地と紅葉山遺跡

▲開拓の歴史を語る防風保安林が広がり、森林性の鳥類の生息の場となっている

発寒川遊水地は伏籠川総合治水対策の一環として、発寒川の洪水流量を軽減するために計画され、安春川合流点の上流に位置し、右岸札幌市側と左岸石狩市側の2つの池で、総貯水量4万㎥（小学校のプール70杯分）、洪水時の湛水面積4.8ha（野球のグランド3.6面分）で伏籠川合流点で基本高水130㎥/sを10㎥/sカットして120㎥/sとする計画です。

全体工事量は掘削土量58,000㎥、周囲堤延長730m、周囲堤盛土量7,000㎥、越流堤2基、排水樋管1基などで、遊水地の底高は池の常時利用も考慮して、平均地下水位より高い標高1.2mに設定しました。

左岸の池の予定地には開拓の歴史を語る遺産の一つである防風保安林があり、ヤチダモ、ヤマグワ、エゾニワトコなどが繁り、アオジ、アカハラ、エゾセンニュウなどの森林性の鳥類の生息の場となっているため、これを残すように計画変更も行いました。

平成11年度に本工事に着手し掘削・周囲堤盛土の施工を行っているところで、平成14年度の完成を目指していました。

今回、4000年前の太古のサケ捕獲施設が発見されたことにより、遊水地の機能を生かしつつ、古代のロマンを感じられるように、遺跡の活用を図るため、石狩市と連携して知恵をしぼっていくことになります。

遊水地の完成は弱冠遅れることになりそうです。

▼発寒川遊水地の全体工事計画と遺跡発掘箇所

石狩川治水学習館（川のおもしろ館）開館10周年記念イベントを開催

石狩川治水学習館（愛称・川のおもしろ館）は、石狩川治水事業80周年を記念して、平成2年、旭川市常盤公園内に開設した治水事業の展示広報施設で、平成11年度には年間で5万6,000人の入場者数を記録しています。

開館10周年となる今年の8月12・13日には、記念イベントが開催されました。澄みきった青空の下、延べ2,000人にもおよぶ親子連れなどが集い、リバーランドゾーンの人気キャラクター達によるステージショーや来場した子供達と川にまつわるクイズやゲーム大会など、川をテーマにした楽しい情報交流が行われました。

ゲーム大会の入賞者には、10周年を記念して作られた「川のおもしろブック」が贈られました。この本は、立体地図や立体写真、音声モジュールなどのさまざまな仕掛けで、流域の地形や治水の歴史、治水施設のしくみ等について、遊びながら理解できる新スタイルの体験型コミュニケーションブックです。

「川のおもしろ館」は、これからも子供達に遊びながら治水の必要性を教える学習施設として期待されます。

リバーランドのキャラクター達と記念撮影

川のクイズを楽しむ子供達

「川のおもしろブック」は、上川管内の各市町村の小学校や石狩川流域の各市町村の図書館などに配布しています。最寄りの施設にてぜひご覧ください。

治水のしくみを楽しいイラストや仕掛けで紹介した「川のおもしろブック」

川のおもしろ館・リバーランドゾーン

『川のおもしろ館』

- ●旭川市常盤公園
  TEL(0166)24-8430 FAX(0166)23-8417
- ●開館時間
  9:00～17:00（入館は16:30まで）
- ●休館日　月曜日（祝日は開館します）
  年末年始（12／30～1／4）
- ●入館無料
  ホームページ
  http://www.terra.dti.ne.jp/~r-land

サケ漁はいにしえの時代から

石狩・紅葉山遺跡で国内最古の捕獲遺構発見

縄文中期のサケ・マス漁の想像図

縄文時代の暮らしを知る大きな手がかりが、今夏、石狩市花川の紅葉山49号遺跡の河川跡で見つかりました。これは魚の捕獲施設（エリ）と呼ばれる仕掛けで、全体像がわかる状態のものは国内初、さらに約3千8百年前の縄文中期という国内最古の、大変画期的な発見です。

この調査は平成7年から始まり、昨年杭を打ち込んだ「河川遺構」が検出され、補足調査を開始した今回、遺構の西側に隣接して50本打ち込んだ杭列と、上流部の西側で杭群が40本発見されました。東と西の杭は配列や大きさが異なることから、東側が開口部、西側が人が乗って作業する捕獲部とみられます。さらに長さ2m、直径3cm前後の木製のモリも出土し、大きさからサケ・マス等の大型魚類が対象とみられます。これほどの施設を何年も使うためには管理が必要で、その時代の人々が社会的ルールを持って使用した様子と、また、油が抜けたサケを干物にすることで冬期の食料としていたことが伺いしれます。縄文時代の高度な文化と知恵が伝わり、今後さらに解明されることでしょう。

この辺りは北海道が進める発寒川遊水地の建設予定地で、これを機に石狩市と協力して、貴重な遺構をたくさんの人に見てもらえるような活用を考えていくそうです。

関係者一同、「初めて目にするものばかり」という画期的かつ希少な発見
※写真・想像図提供／石狩市教育委員会

●詳しい内容やその後の情報は石狩市のホームページで　http://www.city.ishikari.hokkaido.jp.

ふるさとの水辺でかけがえのない思い出を

恵庭市制施行30周年記念「親子川下り大会」「Eボート大会」

親子の楽しそうな姿が見られた「親子川下り大会」

石狩川流域では今夏もたくさんの川下りが行われましたが、恵庭市では子供を対象にした二つの川下りが行われました。まず8月19日の「親子体験川下り」は、市内を流れる漁川の2・5kmを約1時間半かけてゴムボートで下るもの。野鳥や魚の泳ぐ姿、待ちかまえる木々のトンネルなどなど、川でしか体験できない冒険に親も子も感激し、かけがえのない思い出が作れたようでした。

翌20日にはえにわ湖を会場に、市内5中学校から770人の中学生が参加して「Eボート大会」が行われました。環境保全と親水を目的に、皆でゴミを拾った後、手こぎボートでレース。初めて見る湖面からの風景を満喫しながら精一杯オールを漕ぎ、ゴールした後はどの顔も晴れやかでした。

湖上の風景を楽しみながらの「Eボート大会」

石狩川振興財団 活動報告

話題と笑顔満載！ 2000年 夏の水辺

第6回 北海道森と湖に親しむつどい 太陽と森と湖の祭典―かなやま湖

2000.7/29SAT⇒30SUN

「森と湖に親しむ旬間（7月21日～31日）」のメイン事業「北海道森と湖に親しむつどい」が、太陽と森に包まれたアウトドアのメッカかなやま湖で、「第29回かなやま湖湖水まつり」と同時開催という形で、かなやま湖畔キャンプ場特設会場で盛大に行われました。

広大なかなやま湖を舞台に、アクティブな企画が目白押し。「森と湖に親しむつどい」は地元バンドが出演した「ライブinかなやま湖」、そして恒例の「レイクコンサート」を実施。大橋純子さんと柳ジョージさんが豪華なステージを繰り広げました。そして南富良野町の特産品、ダム・洪水模型や水族館他、多数を展示した「森と湖の博覧会」。熱気球の試乗やダム見学会など、たくさんのコーナーはどれも人気で、皆楽しみながら参加していました。

「湖水まつり」では本格的なウィンドサーフィン大会やカヌーレースを実施。また、カヌーばんばや丸太切り大会という森と湖のまちならではのおもしろ競技もあって、手に汗握る展開やハプニングに声援と笑い声が絶えない、大変賑やかなものとなりました。

実際に歩いて感じる高さと広さに驚愕の「ダム見学会」。

熱気球試乗に長蛇の列ができた。空から見るかなやま湖も、また最高！

森のはなとぴあ 2000 石狩川治水90周年記念事業 「feel the River」～in the afternoon～ 「川を感じる午後」

2000.7/22SAT⇒23SUN

園内に石狩川水系の厚別川が流れる札幌市民の憩いの場、滝野すずらん丘陵公園の中心ゾーンに、7月15日「カントリーガーデン」と「こどもの谷」がオープン。その開園を記念した森のはなとぴあ2000が行われ、協賛事業として、石狩川治水90周年を記念した「feel the River」～in the afternoon～（川を感じる午後）が、2日間にわたって行われました。22日の「ジョイントライブステージ～流域から音楽の花束～」と題した、倉橋ルイ子さんら石狩川流域で育ったミュージシャン達のライブとジョイントセッションが繰り広げられ、彼等の音楽から石狩川を身近に感じたステージでした。翌23日は「川と文明」、「世界の固有文化と川」というイメージをふくらませる「ワールドストリーム」（世界から音楽の風）が行われ、今や役者とともにケーナ奏者としても知られる田中健さんを中心に、世界各地の楽器が演奏され、アジアからヨーロッパを巡り、南米から太平洋、そして日本へという壮大な調べに、世界の川のせせらぎが重なる、幻想的な演奏でした。

演奏の合間には、石狩川水系に関する簡単なクイズタイムもあり、世界の川、そして石狩川への関心を高めた午後のひとときでした。

壮大な田中健さんのケーナの演奏

石狩川流域出身のミュージシャンによるジョイントステージ。

第2回 伝統音楽に酔い、石狩川に想いを馳せたひとときを 石狩川流域交流フェスタ開催記念 「トーク＆ミュージック」

2000.7/2SUN

石狩川の環境や振興策などを流域48市町村の住民が連携して考える、「第2回石狩川流域交流フェスタ」。その開催を記念して、江別市の石狩川河川敷の特設会場で「トーク＆ミュージック」が行われました。

第48回NHK紅白歌合戦をはじめテレビやラジオなどで幅広く活躍する、話題の津軽三味線のホープ、登別市出身吉田兄弟の弟・吉田健一さんらによる「モダン津軽三味線とスペイン民族楽器・カホンの調べ」は、川のせせらぎと伝統楽器の音色にしばし酔いしれました。

川からの風景を見ながら下った石狩川交流フェスタ。「水辺トーク」は川下りの感動も手伝って大変和やかな雰囲気の中行われました。「人と生物が共生でき、水の本質を見極めた川づくりを研究中」という流域生態研究所所長の瀬尾氏と、「川の事が日常会話に出てくるような、川の文化を作りたい」と語る水環境北海道専務理事の荒関氏、そして「まず川と人の楽しいにぎやかな関係作りを」と語る（株）リクルート北海道支社の地域活性化事業グループマネージャーの鈴木氏らを中心に、(1)上・中・下流の住民の連携と連絡協議会の設立、(2)川を利用するためのルールづくり、(3)学校教育の中での取り入れ、という今後の指針となるようなキーワードにまで及ぶ、中身の濃いものでした。

今話題の吉田兄弟、弟の健一さんらによる津軽三味線。伝統の音色が石狩川に舞う。

具体的でわかりやすいトークが共感を呼んだ。

平成12年度 森と湖に親しむ旬間 漁川ダム見学会

2000.7/26WED

森や湖に親しむ機会を設けることを目的とした「森と湖に親しむ旬間（7月21日～31日）」の行事の一つ、ダム見学会は毎年予想を上回る盛り上がりで、今年も札幌近郊で四季の美しさを堪能できる場として注目される漁川ダムで、恵庭市の小学生を中心に76名が参加して行われました。

ダム見学では普段入ることができない操作室や発電機室、監査廊などを説明を聞きながら回りました。さらに広い森林公園で、ペットボトルロケットを打ち上げたり、風船に花の種をつけて大空へ飛ばすという、水と緑に関連した遊びに子供達も大満足。初めて来たという子供達が多かったのですが、見学会後に記入してもらったアンケートでは、「ダムのことがよくわかった」、「とても楽しかった」、「来年もぜひ参加したい」という感想が多く、子供達の屈託のない笑顔に今年もこの行事の意義を再確認しました。

見たことのないダム内部。機械に興味津々だったのはやっぱり男の子！

みんなの夢を乗せて色とりどりの風船が空に飛び立った。

石狩川振興財団
活動報告

21世紀の石狩川を見つめたい

母なる石狩川を映像で 石狩川治水90周年記念事業
CD-ROM『石狩川』を制作

重厚感溢れるオープニング。続きはあなたの目でお確かめ下さい。

「為になった」といった、感想も寄せられています。

北海道一世紀は、石狩川の歴史をなくして語れません。非常に曲がりくねった川を意味する石狩川は、その名の通り明治の初め頃までは手つかずの原始河川で、開拓の途についた流域を潤すとともに、つねに脅威を与えてきました。

特に記録的な被害をもたらした明治31年の大洪水は、自治の確立を目指す北海道に大きなダメージを与え、そしてこの大洪水をきっかけに、石狩川の本格的な治水事業が始まりました。

そして今年で石狩川治水90周年。

石狩川と治水の足跡を後生に伝えるため、わかりやすく映像で表したCD-ROM「石狩川」を制作しました。内容は、人知を尽くして治水に取り組んだ人々の歴史や洪水史をナレーションで紹介する「あゆみ」、生息する主な動植物と四季の美しい風景を収めた「流域の自然」、そして石狩川本流・支流の概要や主な施設と、流域48市町村全てを3ブロックに分けて、下流から紹介する「流域の表情」で構成されています。

CD-ROM「石狩川」は、すでに全道の小・中学校、高校や図書館に配布し、反響を呼んでいます。ぜひご覧ください。

アカウンタビリティこそ地域の価値と信用を高める
平成12年度 市町村河川情報委員情報交換会議

「待ったなしでやって来る大きな問題を緊急に解決していかなければならない」という、当財団林信雄理事長の挨拶で始まった平成12年度の市町村河川情報委員情報交換会議。今回は旭川開発建設部の森田康志次長の講話「河川事業の動向」と、北海道大学法学部の宮脇淳教授による「地方分権時代における川と地域づくり」と題した講演が行われました。

森田次長は、「日本は治水なくして社会生産活動そのものが成り立たないという事実をしっかりと認識する」という事を前提に、「治水・利水以外の時にも役立つ川づくりのために、河川管理者は学識経験者や住民等、広く意見を聞きながら計画を作る。そのためにはアカウンタビリティー＝説明責任と、段階毎の評価を行いながら住民の理解を得ていくこと」など、河川事業のこれからを語っていただきました。

行財政システム全般について幅広い見識をお持ちの宮脇教授は、数年後に確実に地方に影響を与える日本の構造転換について解説しました。「財政赤字の危機的状況の中で信用力を高めるためにもアカウンタビリティー＝説明責任を果たさなければならない。そういう時代に入ってくるだろう」との見解を示しました。また「各自治体が個別に施設整備をすることはもはや限界で、今後は分担して財政負担を軽減する。特に河川事業では川という明確なコンセプトを持っているのだから、これを軸にきちんとした地域づくりを行うことで信用力を高めていけるのではないか」と河川事業への考えも語っていただきました。

くしくも「説明責任」という言葉が両氏のお話の中で何度も出てきましたが、河川の面からも経済の面からも、これからの時代の大きなキーワードになると、深く学んだ会議でした。

一番人気のカヌー体験。「また、やりたい」という声がたくさん聞かれた。

好奇心いっぱいの表情を捉えた
「写真の部」大賞の安田さんの作品。

輝く水辺に親子の笑顔が弾けた！
平成12年度 親水体験親子バスツアー～石狩川中流～

毎年恒例、親水体験親子バスツアーは、北広島市内の小学生とその保護者約60名が参加して、8月6日（日）に行われました。三笠市の桂沢湖を経由して、オープンしたての芦別滝里ダム資料館を見学、砂川オアシスパークで昼食後は北光公園で子供達お待ちかねのカヌー体験です。水上の気持ちよさを満喫した後は滝川川の科学館で石狩川に棲む魚達を間近で観察。自然と触れ合い、親子の思い出も深まった1日を、感想文と写真でお伝えします。

受賞者一覧

■作文の部
大　賞　若葉小6年生　中山　由佳
優秀賞　緑陽小6年生　伊藤　慧
優秀賞　東部小5年生　浅香　佑輔

■写真の部
大　賞　北広島市　安田　正弘（父）
優秀賞　北広島市　松藤　聖子（母）

「作文の部」大賞
「お母さんと一緒の日」

若葉小学校　6年生　中山　由佳

「早く起きなさい!!　もう7時30分だよ!!」お母さんが言った。

「ん～ぅ」、それから少したってムックリと起きた。私のお母さんは、いつも起こす時に時間を早くして言うので、いつもの事だろうと思うと!!　…やっぱり、思った通りでした。外を見ると、雨が降りそうな感じでした。「行くの面倒くさいなぁ」、そう思いながら準備をした。そしてお父さんに車で送ってもらって、お母さんとバスに乗り込みました。いよいよ出発。

ガイドさんなどから話を聞いて、さっそくゲームが始まりました。そのうち、最初の見学地、芦別滝里ダム資料館に着きました。話を聞きびっくりした事があります。ダムを作るために土地を移動した人がいたという事です。かわいそうだなと思いました。でも、洪水をふせいで、ダムの土地に住んでいた人達よりもっと多くの人に役立ったと思うので、土地を移動した人はかわいそうだと思うけど、ダムを作ってよかったのではないかと思います。砂川オアシスパークでは昼食をとりました。お腹が、一杯になった所で、北光公園に行ってカヌー体験!!　しかし、説明を聞き、落ちる事が結構あるような事を言っていて、おじけづいてしまいました。それで自分で飛び込まない限り落ちないと言っていた、ボートに乗りました!!　私は、初めて乗って、ずっとこいでいたけどとても楽しかったです。

そして最後の見学地、滝川川の科学館も良かったです。

今日は、面倒くさいと思っていたけど、勉強になったし楽しくて良かったです。天気も良くなったし最高!!　お母さんとの思い出も出来たし、写真もとってもらったし。

…私のアルバムに楽しい顔、楽しい思い出が、また一つきざまれた…。

編集後記

◎17号が20世紀最後の刊行となります。

◎来年、21世紀初年度の1月には、北海道開発行政は国土交通省の所管として、施行されることとなります。

◎先般、平成13年度の国土交通省としての概算要求がなされました。

◎河川部門の「日本新生」へ向けた要求方針として、「IT革命の推進」。「環境問題への対応」「高齢化対応」「都市基盤整備」を重点課題として設定し、各種施策の要求がなされています。

◎実施にあたって、「参加・連携」がキーワードかと思います。

◎このため、ますます「計画策定サイドの知らせる努力」と、「地域サイドの知る努力」を効果的に結びつける事が重要となってまいります。

◎当財団は、そのような役割を担う財団として、21世紀幕開けとして、意を新たに努力してゆく所存であります。

◎今後とも関係各位の皆様方のご支援・ご協力をお願いし、20世紀最後の編集後記といたします。

石狩川振興財団のホームページが開設しました。
気軽にアクセスしてください！
ホームページアドレス
http://www2.ocn.ne.jp/~ishi-riv/